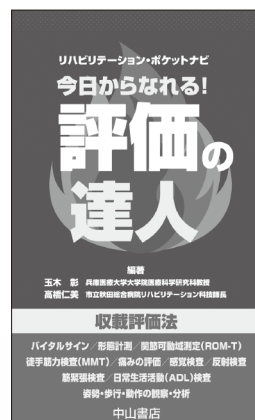


玉木 彰・高橋仁美(編著)

リハビリテーション・ポケットナビ 今日からなれる！ 評価の達人

評者 松永篤彦

(北里大学大学院医療系研究科教授)



チーム医療がうまく稼働している現場では、チーム内で構成されている専門家同士が互いに信頼関係にあるのと同時に、ある職種によって実施された診断および評価結果が、他職種にとっても必要かつ有益な情報となり、しかもその内容(意図)が的確に伝わっている。例えば、整形外科領域のチーム内に理学療法士がいれば、関節可動域検査は、理学療法士が測定した結果を信頼し、活用するはずである。つまり、理学療法士が評価した関節可動域は、罹患した関節の構造とその動きを的確に捉えたうえで疼痛等の制限因子を十分に考慮し、日々の理学療法(治療)後の変化(効果)を加味した最新の結果(角度)であり、その後の治療計画や患者の日常生活を推し量るうえでも貴重な情報となるに違いない。他職種からすれば、言わば「達人」による検査報告であろう。

もともと検査法や評価法は、その性質から、誰が実施しても正しく実施でき、同じ結果と解釈が得られることが求められる技法である。むしろ、上述のような「達人」技は敬遠されることが多い。しかし、理学療法士が臨床現場で実施する評価は、一般に、相手(対象)が「人」そのものであるだけに一様には行えず、患者の病期、病態および個人の特性に応じて実施方法を工夫し、しかも出てきた結果を解釈するにしても多くの情報を統合しなければならない。つまり、「達人」技が要求され、それには熟練を要する。ただし、「達人」技というと、達人たちによって技が異なり、千差万別の技があるように思われがちだが、そうではない。長い臨床経験をもつ理学療法士には賛同いただけると思うが、10年以上ともなると、どの理学療法士も、関節の持ち方、角度計の当て方、測定中の留意点など、ほぼ同じ方法で実施していることに気づく。実施者の手法

を見れば、概ねどのくらいの臨床経験をもつ理学療法士であるかがわかるほどである。つまり理学療法士が実施する評価の技は、経験ある達人からの的確に学べば、短期間にしかも汎用できる技として身につけることができる可能性があるわけである。

このたび、上記のような評価の達人となるための指針書が、中山書店から出版された。著者は、玉木彰先生(兵庫医療大学)と高橋仁美先生(市立秋田総合病院)であり、30年以上のキャリアをもつ達人たちである。この書には、臨床現場で活用する評価項目とその手法が図表入りで解説されている。しかも、現場で活用する手法に限定され、評価結果を解釈するための知識が端的に示されている。さらに、達人(著者)による、達人となるための視点、考え、解釈の方法などが惜しげもなく随所に明示されている。私も30年以上の経験をもつ理学療法士の一人だが、この達人たちの解説をすべて読ませていただいて、「まったく同感!」と、つい言葉に出したほどである。

理学療法士になって間もない方から10年未満の方、ぜひ、この書をポケットに入れて、日々の臨床で評価の技を会得してはいかがだろうか。また10年以上の経験をもつ方も、達人の評価の技をあらためて確かめてはいかがだろうか。そして、この達人の技を活用し、現場の医療チーム内で頼れる専門家となつてはいかがだろうか。30年以上の経験をもつ達人たちの「魂」のこもった、この指針書を強くお勧めする。

●新書判, 272 頁, 4 色刷

定価: 3200 円+税

中山書店刊, 2015 年